

成果報告書

記入日 2018年 3月 30日

氏名 猪原 達生	渡航先国名 中華人民共和国	所属機関 武漢大学 歴史学院
研究テーマ：官僚と生活者の観点から見る唐代宦官研究		
研究期間： 2015年 9月 ～ 2018年 1月		
研究成果（概要） 従来にない新たな観点から宦官研究を行うべく、史資料を改めて収集・整理したことで、様々な新発見があった。また、留学中に現地で研究者と交流して人脈を広げ、新たな史資料を入手した。		
研究成果（詳細） 私の研究は前近代の歴史研究であるので、研究活動に占める現地調査の比重は必ずしも高くはない。加えて、後述するように墓誌を中心とする史資料の収集も留学の重要な目的であるが、すでに写真集などの形態で出版されているものも多く、自ら現地に赴いて実見調査する以外に見る術がないというような史料も殆どない。よって、私の現地での研究活動は、1. 主にこれまで収集してきた史料に現地で新たに得た史料や知見を加えて再度整理して読み直し、それをもとに研究を進めること、2. 既知の史料のなかで判読困難な箇所を博物館等での実見調査によって補正すること、さらに3. 現地で人脈を構築することによって今後の研究の基盤を構築することにあつたと総括できる。以下に私の研究成果を3項目に分けてまとめたい。 1. 研究活動 私の研究テーマは、「官僚と生活者の観点から見る唐代宦官研究」である。これをより詳細に説明すると、私が専門とする唐代の宦官は、本来皇帝の家内奴隷でありながら、755年に勃発した安史の乱以降次第に政治参画を強めて大きな権力を握り、その後皇帝の廃立にまで関与した。そのため彼らはこれまで唐王朝滅亡の元凶と見做され、続く王朝から現代に至るまで様々な非難に晒され続けてきた。しかし、先学と私の研究成果により、唐後期の皇帝が自身の権力を高める目的で宦官に制度上の裏付けをもった権力を与えたことが明らかになっている。そのため、古い研究などにある硬直した宦官観は、様々な観点から再検討を迫られている。		

その方法として、私は宦官を「官僚」と「生活者」という2つの観点から研究を行っている。前者は宦官がただ皇帝の寵愛のみに依拠するのでなく、様々な官職を歴任して昇進していく官僚としての側面に着目してその実態を復元すること、後者は近年歴史研究で導入が進んでいるジェンダー史の成果を踏まえ、宦官が営んだ家庭や結婚、家族のあり方を考察することである。そのいずれにおいても、宦官を含む官僚の死後その墓に収められる石版で、本人の官歴や本貫地、祖先、妻や子などの家族に関する情報が記述された墓誌史料を縦横に活用している。

具体的な研究作業については、まずは主に史料の読み込みと再整理を行った。武漢大学歴史学院のなかで魏晉南北朝隋唐史を研究する中国三至九世紀研究所では、私が日本で所属する大阪大学東洋史学研究室のように研究書や史料がまとまった形で整理された研究室が存在しない。代わりに中国中世史関係の書籍が集中する資料室が存在するが、辞書の利用や書籍の検索については不便な状態であり、また図書館でも留学生への書籍の貸し出しが禁止されるなど、研究活動には少なからぬ困難を伴った。しかし次第にその環境の違いにも習熟し、図書館や資料室に通いながら唐代宦官の石刻史料を読み解き、そこから読み取れる家族構成や婚姻関係、昇進課程について整理し、また宦官をめぐる事件などのトピックについても表を作成、更新する作業を行った。

その過程で特に文宗太和九年（835）に官僚が引き起こし宦官が鎮圧した宮廷政変である「甘露の変」の前後における変化が画期となった可能性が浮上した。その際に宦官集団の勢力図が変わっただけでなく、論功行賞を受けた宦官の昇進動向や、枢密使などいくつかの職掌の運用が変化した可能性があり、これらを踏まえて「甘露の変」を新たな観点から意義付けることを目指している。

宦官の婚姻については、特にその家庭のあり方について研究を進めた。宦官が婚姻と養子によって営む家庭は、史料を読み直しても一見通常の官僚と同様のものとは見えない。しかし、養子への家産の継承や祖先祭祀のあり方は通常の官僚とは異なっている可能性が高く、また宦官は女子の養子を取っており、自身も娘を婚姻させることで人脈を作っていたことが明らかになった。これについてはまだ十分に解明しきれていない点もあるため、今後も研究を続けていく。

さらに留学中に宦官に関係する史料収集を続けるなかで、新たに宦官自身が執筆した墓誌史料が数点存在することを発見した。それらの墓誌には宦官の個人的な交流を示す記述が含まれているのではないかとみられ、現在引き続き読解中である。

以上の研究成果のうち、宦官制度史に関わる分野について、帰国前に「唐代宦官经历与政治活动」という題で、研究所で開かれた「珞珈中古史青年学术沙龙」にて発表した。しかし、研究所が刊行する学術雑誌『魏晉南北朝隋唐史資料』への論文発表は間に合わなかったため、それを速やかに実現させるのが私の義務である。

この留学で得られたものは、まず史資料の収集と整理を行う十分な時間と、宦官研究の本場である中国に滞在して学ぶ経験である。この留学の成果を無駄にすること無く、今後も研究を続けたい。加えて、現地で学び飛躍的に成長した中国語能力を活かし、宦官に関わる研究こそ進んでいるもののジェンダー視点の導入が遅れている中国の学界に自身の研究成果を伝え、また日本の研究動向を紹介できるようになりたいと思う。

2. 学会・研究会への参加と研究者との交流

武漢大学滞在中は、大学で開催された様々な授業や研究会、勉強会などに参加することができた。語学クラスと概説講義や専門講義、ゼミなどの授業に参加したが、中国語で授業や発表を聞き、また自身もゼミなどで発言・発表することは極めて有益で得難い経験となった。

現地でご指導いただいた劉安志教授は敦煌・トゥルファン学を中心に唐代史を専門としており、私の授業中の積極的な発言を歓迎してくださり、発言や発表のたびに有益なアドバイスをいただいた。それだけでなく、生活面でも常に私を気にかけて、様々なサポートをしてくださった。また、研究所で唐代後期の政治史を専門とする黄樓准教授には、専門講義から新たな知見を得られただけでなく、研究発表をした際にその問題点を的確にご指摘いただいた。さらに、中国三至九世紀研究所長の凍国棟教授をはじめ、魏斌教授や呂博准教授にも、講義やゼミに参加してお話させていただくなかで親しくご指導いただいた。もちろん同年代やより若い現地の大学院生との交流も、とても楽しいものであった。

現地では定期的に様々な研究会や若手研究者のサロンが開催されており、また大学を訪問した他大学の一流の研究者の講演会などが度々開催され、武漢にいながらにして中国中の研究者と交流し最新の学術成果を学ぶことができた。それだけに留まらず、時には日本から著名な教授が武漢大学に来ることもあった。武漢大学歴史学院には、1980年代に唐長孺氏と日本の谷川道雄氏との交流以来、長く日本との学術交流を重視し日本の学術成果を積極的に取り入れる伝統がある。実際に日本から研究者が訪問した際は、私も通訳としてともに研究会やその後の懇親会に参加し、教授同士のコミュニケーションをサポートすることもあった。これもまた、語学力の向上や人脈の構築に資するものであったと考えている。

3. 調査と史資料の収集

今後の研究活動に資する様々な史資料の収集も留学の大きな目的であった。

史料収集の面では、2017年3月に西安市を訪問して西安碑林博物館を調査し、また大唐西市博物館では史料収蔵庫に入り、宦官関係墓誌を実見調査することができた。しかし、当初希望していた西安碑林博物館の収蔵庫には入ることができなかった。これは今後さらに中国で実績を積み上げることで現地の研究者に信頼され、調査の機会を得られるよう努力したい。

武漢大学中国三至九世紀研究所では魏晋南北朝隋唐史に関する中国で出版された最新の史資料を継続的に購入・収蔵しており、そこには日本で入手困難なものも含まれる。そこに採録された最新の石刻史料の拓本写真や情報、また研究論文は、私の今後の研究活動の可能性を広げてくれるものであった。それに加えて、唐代史や宦官、女性史等に関する日本で入手困難なものを含む研究文献や史料集、また未入手の基礎的史料を購入、複写して持ち帰ることができた。

合わせて、宦官の比較研究を行うためにビザンツ帝国を中心とする西洋中世史分野を自身の専門研究の片手間に学んでいるが、これについても中国で出版された関連する研究書や翻訳史料を入手することができた。今後これらを用いて研究を広げ、また日本の学界に紹介したいと考えている。

留学中の生活・研究でのトピックス

1. 武漢大学での研究活動と生活

私が所属する武漢大学は1893年にその原型が成立して以来100年以上の伝統を誇っており、数ある中国の大学の中でも最も美しいとの評価が広く定着している。四季の移り変わりも明確で、とりわけ3月上旬から中旬にかけては桜が美しく、市民はもちろん中国各地からも観光客が訪れる。

私の留学は様々な困難があったが、そのなかで特に印象的なのは入学当初に大学の学生寮の一部が改修中であり、そのため私を含むほぼ全ての新規留学生在が約1ヶ月のホテルでの滞在を余儀なくされたことである。事前に期限が明示されなかったこともあり、多くの学生が少なからぬ不安を抱えての船出となったが、その過程でホテルでともに過ごした留学生同士に団結が生まれ、私も様々な国から来た留学生の友人を作ることができた。これを始めとする様々な困難を自身の努力と友人との協力で乗り越えたことは、留学中の大切な思い出である。

寮に移ってからは生活にも慣れ、研究の傍らで様々な活動を行った。毎年11月下旬に開催される国際文化祭では現地の日本人会の一員として活動し、さらに現地の日本語学科の学生との交流会にも参加した。個人的にも多くの中国人学生や留学生と交流し、滞在中の9ヶ月間タンドム形式で現地の中国人学生に日本語を教えた。また、現地で5人の中国人と日本人学生の日本留学や進学、奨学金取得のための書類作成をサポートし、そのいくつかで成功を収めたことは、私の小さな誇りとするところである。

2. 中国全土への旅行

滞在中は武漢から中国の様々な都市に旅行した。北はフフホトから南は広州や香港、西は甘粛・四川まで幅広く旅行し中国の大きさを肌で感じることもできた。とりわけ私が専門とする唐王朝とその祖先の揺籃の地である山西省の大同や太原、また大阪大学で関連する講義を聞き、かつて出土文書の調査も行った敦煌を訪問できたことは、今後研究を進める上でも貴重な経験になった。

今後の社会貢献

宦官はいうなれば前近代における作られた性的少数者である。今に至るまで異文明の猟奇的存在とみなされてきた宦官の実態を実証的に解明することが、性的少数者の抱える問題の解決や権利の保護を喫緊の課題とする現代社会において大きな現代的意義を有するという思いを私は一貫して持っており、それが私の研究意欲を支えている。

とりわけ留学中に性的少数者を総称するLGBTという言葉が社会にすっかり定着したことは、私にとって予想外なことであり、社会の変化の速さを実感させるものであった。だからこそ、質の高い研究成果をコンスタントに提示し、社会に還元していくことが私の急務である。専門論文を執筆するだけでなく、ブックレットの出版などの制度も積極的に利用し、新たな宦官像を社会に提示していきたい。

最後になるが、春には桜の咲き誇る美しい武漢大学で学び、研究ができたことは大変幸せなことであった。この得難い機会を下さった松下幸之助記念財団様に心からの感謝を申し上げますとともに、今後の研究活動や社会貢献活動によって少しでも恩返しができるかと考えている。



私が所属する武漢大学のなかでも古い建物の写真です。武漢大学は1893年にその原型が成立して以来100年以上の伝統を誇っており、数ある中国の大学の中でも最も美しいと評判です。

この美しい大学で学び、研究ができることに大きな喜びを感じ、その機会を下さった松下幸之助記念財団様に心から感謝しています。

中国三至九世紀研究所所長の凍国棟教授の演習風景です（左から2番目が私）。中国の演習は先生が提示した問題や史料について学生が討論する形式が多く、内容も最新の学説を踏まえた高度なものです。

日本の中国史研究に対する注目度も高く、多くの学生が自身の研究に日本人研究者の成果を取り入れようとしています。また、一部の学生は日本語を話すことができ、日本に留学経験がある方もいました。



日本の龍谷大学から都築晶子先生（中央）をお招きした際の食事会の写真です。（左が私、右が指導教員の劉安志教授。2016年9月撮影）。

武漢大学では様々な研究会や学術講座が頻繁に催されており、武漢に居ながらにして中国や日本の有名な研究者の最新の研究成果に触れることができます。そこで得られた人脈も、今後研究活動を続けていくにあたっての大きな糧にしていきたいと思います。